

---

# 世界を壊す救世主 番外編

結木しぐさ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

世界を壊す救世主 番外編

### 【Nコード】

N6711P

### 【作者名】

結木しぐさ

### 【あらすじ】

世界を壊す救世主番外編です。“闇”と呼ばれる黒き獣たちから世界を守り救うを“天子”として召還されたわたし。だけどこの世界を救おうなんてこれっぽっちも思わない。「こんな世界わたしがぶち壊してやる」異世界トリップファンタジー。（世界を壊す救世主より）

## 登場人物紹介

【世界を壊す救世主】本編の登場人物紹介です。

ながさわかのん  
長沢花音

性別：女

容姿：ダークブラウンの髪、黒の瞳

備考：本作主人公。異世界より世界を救う“天子”として召還される。

## 【アデウール国】

アゼリ・ディア・アデウール

性別：男

容姿：銀髪、薄い青の瞳

備考：アデウール国の第一王子。

せい  
聖・フワン・フェジー・リード

性別：男

容姿：金髪、深い青の瞳

備考：神官長。年齢は40過ぎくらい。

レヴォラ・シアード

性別：男

容姿：赤茶の髪、飴色の瞳

備考：王都騎士団2番隊隊長。後に花音の専属護衛となる。

セハン・ルファシー

性別：男

容姿：紫がかった銀髪、銀の瞳

備考：宮廷医師。見た目が女性的。

テルタツテ・ケサイム

性別：男

容姿：黒髪、赤と紫のオッドアイ

備考：五大魔術師2階級。最年少で王宮魔術師となった天才美少年。花音の専属護衛。

## 【闇】

ナナリ

性別：女

容姿：黒髪に黒の瞳

備考：人魚の姿をした闇。偉い立場にいて力も強い。

あの方

性別：？

容姿：？

備考：？

## フェジー様のお名前（前書き）

シリ阿斯ではありません、コメディよりです。  
本編総無視となっております。

- ・ 本編イメージを崩したくない方
- ・ 世界を壊す救世主をお読みでない方
- ・ よく分けの分らない話が嫌い方
- ・ その他いろいろ不快に思うところがある方

上記に当てはまる人は読まないようお願いします。

## フェジー様のお名前

それはレヴォラと出会った数日後……

このボロ部屋で穏やかな日々を過ごしている時だった。

たまたまセハンが遊びに来たとき、わたしはフツとそのことが頭をよぎったのだ。

「ねえ、セハンさん」

「ん、なんですか？」

わたしの前の席に座るセハンはちょこつと首をかしげた。男性にしては長いその髪がサラリと肩を流れて思わず見とれる。

ついつい自分の痛んだダークブラウンの髪を見てため息をつきたくなった。

「なんなんですか？」

「ああ……いえ。フェジーさんの名前ってなんだかすごく長ったらしかったですよ？あのクソおうっ……いえ王子様よりも長かった気がするんですけど？」

わたしが本名を名乗ったときにフェジーが名乗ってくれた名前を思い出そうとするが、あやふやでいまいち出てこない。さすがのわたしだってあんなに長い名前を覚えるのは無理だ。

「聖・フワン・フェジー・リード様、ですよ」

「そんな名前でしたね。あれってなんであんなに長い名前なんですか？」

聞けば、セハンは丁寧に答えてくれた。

「まず、最初の“聖”は代々神官長になる人に与えられる名前ですね、神官の人間に言わせれば聖を名乗ることはかなりの憧れらしいよ」

「なるほど」

「んで次に、フワンってのはフェジー様の名前で……」

「え？……フェジーが名前なんじゃないんですか？」

どの人もフェジー様、フェジー様って呼ぶからフェジーが名前なのだろうと当たり前のように思っていたが違うらしい。

「フェジーっていうのは簡単に言えばあだ名だね。神官になる人間はその時の神官長から別名をいただくんだよ。フェジー様だけじゃなくて神官ならみんな別名をもっていてそれで呼ばれるほうが多いね。むしろ本名で呼ばれる人間の方が少ない」

「へえ……そうなんですか」

わたしは感心しながら頷く。

「最後にリードってのは彼の姓。ちなみにリード家は代々神官をやっている偉い家なんだよ。確かフェジー様の祖父が前回の神官長だったかな」

なるほどね。

当たり前だがちゃんと全部に意味があったようだ。

それにしてもあんなに長ったらしい名前だと名乗るのも大変なんじゃないだろうか？

それに……

「セハンさん」

「なんだい？」

「つまらないことを言ってもいいでしょうか？」

そういえばセハンは少々困惑した顔をしながらも頷いてくれた。

「フェジー様の名前ってフワンなんですよね？」

「……そうだよ？」

はつきり言っただけなのに今から言うことはかなり失礼なことだが、思ってしまったんだからしょうがない。

「フェジーさんって、フワンっていうよりガチンって感じじゃないですか？」

体系的にも内面的にも全然フワフワしてないし、絶対ガチンって名前のほうが合っていると思う。

うんうんと頷くわたしを見て、セハンは苦い笑みを浮かべていた。

おしまい



## フェジー様のお名前（後書き）

お気に入り登録100人突破記念に書いたお礼小話です。  
旧ブログ閉鎖のためこちらに移動させました。

本編イメージ壊しまくってごめんなさい（汗）  
こういうの好きなんです。

## セハンの人気度（前書き）

シリ阿斯ではありません、コメディよりです。  
本編総無視となっております。

- ・ 本編イメージを崩したくない方
- ・ 世界を壊す救世主をお読みでない方
- ・ よく分けの分らない話が嫌い方
- ・ その他いろいろ不快に思うところがある方

上記に当てはまる人は読まないようお願いします。

## セハンの人気度

それはとある日のこと……

「おいっ 見るよこれ」

あのボロ部屋にいるのに飽きて廊下をうろちよろとしていたときのことだ。

フツと前方にものすごくはしゃいだ声をだす衛兵を見つけてわたしは首をかしげた。

手に何か持っているようである。

「うわぁ…… やばいなっ」

「何と可憐な……」

「いつ見ても可愛いですよね」

衛兵たちはソレをみて口々に感想を述べていく。  
その頬はホンの少し赤くなっているように見えた。

はつきり言ってしまうば

筋肉ムキムキで、腰には剣をさしている大の男がそんなことをしても可愛くもなるともない。

「いったいどこから手に入れたんだよその写真」

「それは秘密だって」

どうやら彼らが見ているのは写真のようだ

それが分かると次に気になることが出てくる。

いったい誰が写っているというのだろうか？

きつと誰だってそう思うに違いない。あんな風につつとりと見ているのが誰なのか、気になってしょうがない。

だからと言って、わたしはこの屋敷では避けられている存在だし見せてと言っても見せてもらえないだろう。

その前に逃げられてしまうのがおちだ。

しばらく考えたあと後ろを通りすぎるときにチラリと見てみよう作戦をとることにした。

衛兵たちは写真に夢中のようだしきつとわたしが後ろを通っても気がつかない……はず。

よしっ！つと気合を入れたわたしは、なるべく自然な感じを装いながら廊下を歩き出す。

そしてちょうど衛兵たちの後ろあたりに来たとき、その隙間からチラッとその写真を見て、思わず足の動きを止めてしまった。

「…………え」

無意識のうちに出てしまった声にハッとしてわたしは急いでその場から離れる。

今見たのは……

いや思ったような写真ではなかったが……そう、悪い写真ではなかったのだが……

「いやあ、やっぱりセハン殿は男装しているときが一番だ」

うつとりと呟かれたその言葉を背にわたしは一度も振り返らずに歩き続けた。

写真に写っていたのはセハンだったが、今よりも若い頃だったように思える。なによりも今の女性的な雰囲気は全くなくて、まさに男という感じだった。

髪も短かったし、なぜか剣を持っていたし、ワイルド感たっぷりだったように思える。

不覚にもときめきそうになったのは秘密だ。

後に聞いた話だが、セハンは男の格好をしていたときにあまりにも男にモテていたらしく、それに嫌気がさして女性的な振る舞いをはじめたところその人気は落ち着いたのだとか。

セハンの女性的な振る舞いの意外な訳を知ったわたしはなんだかセハンも色々大変だなと同情したのだった。

おしまい

## セハンの人気度（後書き）

お気に入り登録300人突破記念のお礼小話です。  
旧ブログ閉鎖のため移動させました。

無心で書いたので……なんか酷いですね（汗）

## Merry X'mas? (前書き)

本編総無視。

あえて本編と交えるなら、レヴォラが敬語になる前の話です

クリスマス特別編。

M e r r y X ' m a s ?

とある日のこと

自分の部屋から出たわたしはいつもと少し違う光景に首をかしげた。

王宮内で使用人が忙しそうにしているのはいつものことだが、今日はいつも以上に人が多いしその顔に焦りがある。

「何かあるんですか？」

傍らにいるレヴオラにそう聞くと、彼はああと頷いた。

「今日と明日、聖夜祭があるんだ」

「聖夜祭？」

聖夜……といえは連想するのはクリスマスだ。それと似た類のものだろうか？とわたしは考える。

「どんなことするんですか？」

「そうだな……。アデウール国で聖夜祭は、マイナーな行事だから、これといって何をするか決まっているわけではないのだが、主に神官の人間が活動している。祈を捧げたり、貴族や王族の子供に話をしてやったり、あとは神官長が神に踊りを捧げたり……」



ん？

神官長……が踊り？

「あの、神官長ってフェジーさんですよ？」

「そうだが？」

「フェジーさん、が踊るんですか。あのムキムキで強面のフェジーさんが？」

「そうだ」

……想像できない、いやっもうしてしまったが。

フェジーの踊り……見たいような、見たくないような……複雑な心境だ。

「……フェジー様の踊りは力強く、人気も高いと聞いている。お前いったいどんな想像をしているんだ」

天使の衣装に、可愛らしい振り付けの踊りを想像しているなんて、言えない……。

「はあ……それで、お前の世界にはないのか？こういった行事は」「えっ、ああ……ありますよ。クリスマスといって、サンタクロースっていうおじさんが子供たちにプレゼントくれたりするんです」

少々説明を要約しすぎた気もするが面倒だったので許してほしい。

「子供たちにプレゼント？そのサン……なんちゃらはよほど金持ちなんだな。世界にどれだけの子供がいるか……。ん？お前の世界の人口は少ないのか？」

何故だろう？

なんかものすごく可笑しい方向に話がいっているが、今さら実はサンタは……なんて説明するのも大変なので笑ってごまかした。

「えーとそれから、恋人や友達、あと家族……同僚なんかでもプレゼントをあげたりするんですよ。わたしも去年のクリスマスは家族にプレゼントしました」

去年のクリスマス、懐かしい……

もう子供でもないわたしに母がクリスマスプレゼントをくれた。弟がずいぶんと高そうなネックレスをくれた。

家族でプレゼントを交換して、ケーキを食べるだけの1時間にも満たないパーティーだったが、なんとも愛しく温かい日だった。

でもそんな日はもう2度とこないのだろう

今年のクリスマスは……

「恋人や友達、家族に同僚、か。……そうだ！」

レヴォラはわたしの言葉を聞いて何か思いついたように自分のポケットを弄り始めた。  
しばらくするとポケットからなんと可愛らしい包み紙がでてくる。

「やる」

そう言って渡された可愛い包み紙。

見た感じは飴に似ているが、異世界の食べ物なのでよく分からない。  
い。

「イライラしたときのために甘いものは持ち歩くようにしているんだ。こんなものでよかったら……えーっとクリスマス？のプレゼントにやる」

少し照れたようにそういう彼。  
荒みかけていた心がふんわりと温かくなったような気がした。

「……ありがとうございます」

レヴォラにはちょっと似合わないその可愛らしい包み紙がすごく温かく感じる。

今年のクリスマスは……

## Merry X'mas? (後書き)

何でもありのクリスマス特別編  
あとがきという名の言い訳

レヴォラ編

甘くしてみたつもりです。

本編ではあまり出来ない甘さ……でもないですね

レヴォラと主人公を書いているとつい甘くしたくなります(汗)

さて、

特別編はまだまだ続きます！

とにかく本編無視ですので、イメージ崩された方申し訳ないです  
なるべく多くの登場人物とのクリスマスを書きたいと思ってます。

それでは

少しでも多くの方にお付き合いいただけると嬉しいです。

M e r r y X m a s ? (前書き)

本編総無視。

クリスマス特別編

## M e r r y X ' m a s ?

聖夜祭はマイナーな行事といってもそれはあくまで庶民の間での話。

神官たちにとっては大きな行事であり、王宮内でもそれなりに重視されているようだ。

そのため、実力のあるレヴオラも警備に回された。

一見わたしは無防備状態だが、見えないところで護衛が守ってくれているらしい。それからテルタツテが守護の魔術をかけてくれているとか、いないとか……

そんなこんなでレヴオラなしでもわたしは安心して王宮内を歩き回れている。

神官たちの行事というだけあって、今日は神官の格好をした人間が多く走り回っていた。

聖夜祭のメインは明日の夜。今日は前夜祭のようなものらしい。

ちなみにフェジীর祈のダンスも明日だとかで……

「お嬢さん、何一人で笑ってるの？」

思わずにやけてしまったわたしにそんな声かけられた。  
サラリと靡く紫っぱい銀髪が何とも羨ましい。

「いえ、ちょっと思い出し笑いですよ」

「何？ 気になるね」

「たいしたことじゃありませんから」

そう言って笑えば、ふっんという顔をされた。  
なんだかすごく疑われている気がする。

「そういえば、今日って聖夜祭っていう行事らしいですね。セハ  
ンさんは何かしないんですか？」

「ん？ …… そうだね、僕はただの医者だから特には……」

「そうなんですか……」

やっぱり神官たちの行事なんだなあと思う。

「そうだ。お嬢さんは聖夜祭がどんな行事か知ってる？」

「えっ …… ああ、いえ。神官たちが頑張っている行事だとしか……」

「ふうん、そっか」



セハンはそういうとその瞳をスッと細める。  
なんだろう、一瞬クラツときそうになった。

この色気は一体どこからくるんだろうか？  
いつもは女性的なのにフツとした瞬間男性的な色気がでて困る。

そんなことを疑問に思いながら、その瞳の甘さに負けないよう彼  
を睨み返そうとしたその時

わたしの髪に柔らかな感触が触れた……

「……………はっ？」

無意識に自分の髪を押さえながらもびっくりしてセハンを見上げ  
る。

見れば彼は可笑しそうに妖美な笑みを浮かべていた。

「なっ、何するんですか!？」

「クククツ、ごめんごめん。……聖夜祭はね、世界の平和を願う  
日なんだ。昔は、世界を救う天子を祝う日でもあったらしいよ。だ  
から今日と明日の主役はお嬢さん……かもね」

「えっ……………」

何それ？

呆然とするわたしを彼はにこやかにいつもの笑みで見つめる。そこに先ほどまでの妖美な雰囲気はない。

セハンは最後にポンポンとわたしの頭をなでると笑いながらその場を去っていった。

その後姿をわたしはただただ見つめることしかできない。

何だっ たんだ 一体……

セハンの姿が見えなくなった頃、わたしはソッと空を見上げた。先ほどから、頭を回っている言葉……

“昔は、世界を救う天子を祝う日でもあったらしいよ”

天子を……祝う……祭り、ね

「ふうん」

わたしはゆっくりと、微かにセハンの温もりが残る髪を撫でた。

## Merry X'mas? (後書き)

なんでもありのクリスマス特別編  
あとがきという名の言い訳

### セハン編

色気を出そう!っと思って書いたんですが……  
あれ?なんか色気ないですね(汗)  
甘くなりすぎず……色気をだして最後はちょびっとシリアスに  
イメージはそんな感じです、はい  
なんでもアリですから許してください

特別編まだまだ続きます!

M e r r y X , m a s ? (前書き)

本編総無視

主人公性格崩壊？

クリスマス特別編

M e r r y X ' m a s ?

一夜明けて、聖夜祭二日目となる今日。

わたしはこの世界に来て初めてと言っていていいほどの胸の高鳴りを感じていた。

あと数分ほどで始まるのだから仕方がない。

えっ？

何がって？

今回の聖夜祭のメインイベント、神官長様が神へと捧げる舞が、だ。

「花音……なんか……いつもと大分様子がちがうけど、大丈夫？」

隣で一緒にフェジীর踊りを見に来たテルタツテが何とも言えない顔をしてこちらを見ていた。

赤と紫の瞳が、スツと細められている。

「え……別にいつもと同じだと思うけど、何か変？」

「うーん、変と言えば変かな？……何ていうか浮かれてる？」

別に間違っではないが、自分よりもずっと年下のテルタツテに浮かれてるといわれるとやはり落ち込みそうになる。

「あつ……ほらっ始まるみたいだよ」  
「えっ」

そういわれてステージの方を見れば、フェジーが丁度舞台袖から出てくるところだった。

思わず息を呑む……

フェジーが天使の衣装を着て……とか考えていた自分がすごく馬鹿らしく感じた。

いやっあながち間違っているわけでもないが……

「わぁ……綺麗だね、衣装」

隣でテルタツテが感想を言っているが返す気にもなれない。

白い衣装に身を包んだフェジーは何とも美しい剣を手にしていた。中央に立つと一度深く礼をして、スツとその青い瞳を細めたかと思つと踊りだす。

力強く……どこか繊細なその舞に思わず見とれてしまった。

「すごい……」

その一言しか出てこないほどに……

「フェジーさん！」

わたしは神塔の自分の部屋にさっさと入ってしまおうとするフェジーを叫ぶようにして止めた。

走ってきたから少し息が荒い。

「そなた……どうかしたのか？」

振り返ったフェジーはわたしの訪問が意外だったのだろう。少し驚いたような顔でこちらを見てきた。

「えと……あのっ、舞、すごかったです。感動しました」

わたしは顔を息を整えて顔を上げると、とにかく思ったことを言う。

するとフェジーはますます驚いたような顔をしてこっちをみてきた。しかしそんなこと気にしていられない。

「動きとか、力強いのにどこか繊細で……動きも安定してましたし、すごく練習したんだろうなって思いました。本当に、すごくすごかったです」

言いたいことをいい終えたわたしは満足してニコリと微笑む。

「……………そなたは、元の世界であのようなものに興味があった



のか？」

こちらを見たまま瞬きを繰り返していたフェジーだがしばらくすると、フツと思いついたようにそう言った。

「興味……そうですね学生時代は演劇部でしたからそれなりには……裏方専門でしたけど」

「そうか……」

フェジーはそう言うのと黙り込んでしまった。

不思議に思いながらもしばらく彼を見ているとチラリとその視線がこちらに向けられる。

一瞬ドキリと胸が高鳴った。

「褒められるとは……案外嬉しいものだな」

そう言ったフェジーの瞳がやんわりと細くなり、唇が弧を描く。

「ありがとう」

フェジーのその笑顔に熱が頬に集まっていくなかを感じる。  
こんな体験いつぶりだろうか……

フェジーを見たまま動けなくなっていたその時、

「花音っ!」

フツとそこに、今までいなかった存在が割り込んできた。  
ローブをすっぱりと被り、赤と紫の瞳をもったその少年。

「テルタツテ……」

呟くように言えば、彼はつかつかとわたしの前まで歩いてくる。

「僕を置いていくとか酷いよ」

ああ、フェジーに早く感想を言いたくてテルタツテを置いてきてしまったのだった……

「ごめんなさい」

「まあいいけど……」

テルタツテは怒っているというより呆れているという感じである。  
まあ、今回はわたしが悪い。なんとも年齢にそぐわない行動をしてしまった。

「……ああそうだ。わたしの部屋に差し入れのお菓子がたくさんある。よかつたらそなたたち寄っていくか？」

「……ぜひ」

そんなわたしたちをフェジーは穏やかな瞳で見つめていた。

## Merry X'mas? (後書き)

なんでもありのクリスマス特別編  
あとがきという名の言い訳

### フェジー&テルタツテ編

本当はフェジーとテルタツテ分けて書いてたんですけど、テルタツテはまだ登場して間もないのでちょっとネタバレになってしまい、無理やりフェジー編に割り込みさせました。

ですからこの話のメインはフェジー様です。

テーマはフェジー様を笑わせよう！です

テルタツテがいたのであんな感じで終わりましたが、本来はもう少し甘めでした

急いで書いたのでこれまたグダグダで、しかも主人公のキャラが大分ズレてますね(汗)

何でもありですから許してください。

特別編はまだまだ続きます！

ですが、更新は明日になると思われます。  
すいません

M e r r y X ' m a s ? ? (前書き)

本編総無視

クリスマス特別編

一番キャラ崩壊してます

本編重視の方は見ないことをおススメ

M e r r y X ' m a s ? ?

天子と王子。

王子と天子。

この関係はどんなに切りたくても切り離せないものだ。  
たとえどんなに切りたくても……

「ほお、それはそれは天子の世界は随分と教育熱心だな」

無駄に長つたらしいテーブルの端と端に座るわたしと王子。

「そんなことはありません。こちらの世界のように野蛮な戦闘がない分学問に力を入れているだけです」

ニコヤカに語る王子にわたしも精一杯の笑顔を返した。

王子の頬が一瞬ピクリと動く。

「しかしそんなに学問ばかりしては体がなまるのではないか？ ああだから天子はたかが馬車に乗ったくらいで筋肉痛になってしまったのか」

今度はわたしの頬がピクリと動いた。

「生憎わたしの世界には馬車なんてものございませんから。魔術なんてものよりもっとハイテクですばらしい技術のおかげでこの世界より数段すばらしい生活をしておりました」

「さきほども言っていた科学というものか？人体の瞬間移動も出来ぬものがハイテクと考えるは……やはりそちらの世界は学問も劣っているのでは？」

「だったら王子様は方空の上に何があるかお知りですか？そもそもこの世界の形を知ってるんですか？地球は丸いんですよ？知ってますか？」

「地球とは何だ。空の上に消滅の世界と聞いている。行けばみな飲まれて消えてしまう」

「それ誰が言ったんですか？空の上に行けないからって適当なこと言っただけですよ。っというかその理屈が間違っているといった人間はいままで一人もいなかったんですか？もしくはその事を証明しようと空の上に行った人間とか……ああそのための技術がないんですものね、それじゃあ仕方がないか」

「お前の世界と一緒にするな。本当に消滅の世界であつたらどうするつもりだ？お前は人の命が簡単に消えても言いとでも？」

「そんなことは言ってませんよ。わたしはただっ」

「ねえレヴオラ」

いつまでもいい合いを続ける二人をテルタツテはあくび交じりに  
見ている。

「何だ？」

「一体誰？聖夜祭の記念に天子と王子の食事会を提案したの？」

「王宮の老人たちと聞いているが？なんでも天子と王子の結婚を  
望んでいるとか……」

「あんなのが未来の王と后だったら僕この国出て行くよ」

テルタツテはそう言ってため息をついた。



## M e r r y X ' m a s ? ? (後書き)

なんでもありのクリスマス特別編  
あとがきという名の言い訳

### 王子様編

本当にごめんなさい!!

忙しすぎて猛スピードで書いた小説

書き直しするつもりがなかなか時間が出来ず……

そのままです

いつか書き直します

時間があるときに……はい

## とある疑問（前書き）

- ・ 本編イメージを崩したくない方
- ・ 世界を壊す救世主をお読みでない方
- ・ よく分けの分らない話が嫌い方
- ・ その他いろいろ不快に思うところがある方

上記に当てはまる人は読まないようお願いします。

## とある疑問

青い月が空に昇る。

いつもと変わらぬ静かな夜のこと……

「ねえナナリ」

「なあにカノン？」

当たり前のように部屋のソファに腰掛けるナナリを見ながらわたしはずっと疑問に思っていたことを口にした。

「わたしとナナリの会話って外に聞こえてるんじゃないの？」

嫌だろうが何だろうがわたしは天子なわけで、この部屋の外にも見張りが一日中いる。

それなのにこんなに堂々と闇であるナナリと会話していてどうして気がつかれないのかと不思議に思っていたものの聞かずにいるまま日々を過ごしていたのだ。

ナナリはわたしの疑問を聞き、何を今更といったような顔でこちらを見る。

「そんなの魔術でどうにかしているに決まっているでしょう？」

「でもこの部屋には侵入者用の魔術がしてあるってテルタツテが

……」

「それは実体がある者に足しての魔術だもの」

「実体？」

「そうよ」

ナナリはニヤリと微笑むとソファから立ち上がりふわりと浮かんだ。するとナナリの体が歪み黒い霧が宙を舞う。下半身が完全に霧となったナナリは自慢げにわたしを見下ろした。

「どんなにはつきり見えていてもこのわたしは所詮偽者。本当の体はちゃんと闇の縄張りにあるわ。確かにこの部屋には魔術が施されているけど、魔術をかけたのは五大魔術師ではない一般の魔術師ね。このくらいの魔術なら私の魔力で誤魔化せる」

「一般の魔術師……わたしってやっぱり軽く見られてるのね」

「クスクス……そんなに自分を卑下にしないでちょうだい？そんな連中をこれから見返すのが楽しんじゃないの」

霧になっていたナナリの下半身が元に戻り、彼女は再びソファに腰を下ろした。

「世界は変わる。貴方を崇め敬い、貴方なしでは生きられなくなる。そしてそんな連中を……ふふっ」

ナナリはそこまで言って言葉を止めた。

言わなくても分かるでしょう？というような顔でゆったりとした笑顔を浮かべている。

そんなナナリからわたしはソツと視線を外した。

「……………もうすぐ夜明けね」

「あら、もうそんな時間？」

呟くように言えばナナリはふわりと窓の近くまで浮かび上がり窓の外を見た。

「本当ね、それじゃあ私はそろそろ失礼するわ」  
「ええ」

ナナリはこちらを見るといつものように妖美な笑みを浮かべる。

「それじゃあまたねカノン」  
「またね、ナナリ」

次の瞬間ナナリの姿は黒い霧となり、まるで空気に溶けるように消えていった。

静かになった部屋。わたしは気になることがありチラリと入り口となる扉を見る。

少し躊躇したものの好奇心には勝てずわたしは口を開いた。

「……衛兵さん？」  
「……はい！なんでしょう？」

先ほどナナリと話していたときと大して変わらない大きさの声で、扉の外にいるはずの衛兵に呼びかけてみた。

「……なるほどね」

すぐに返ってきた返事にナナリの魔術のすばらしさを実感せざるえない。

「あの、天子様？」  
「えっ、あっ！ごめんなさい」

わたしは見えるはずもない衛兵に向かってとっさに笑顔を作った。

「えーと……今何時ですか？」

そんな時計を見れば分かるようなどうでもいい質問にきちんと答えてくれた衛兵に優しさを感じたのでした。

おしまい

## とある疑問（後書き）

世界を壊す救世主お気に入り登録900人突破記念

私の小説を読んでくださっている皆様に心より感謝いたします。

発見しました（前書き）

本編総無視

ややコメディ

本編のイメージを壊したくない方は読まないことをおすすめします。



発見しました

「そなたのその髪は地毛か？」

「……はい？」

突然の質問にわたしは首をかしげた。

今日も威厳たっぷりのフェジーだがその瞳はどこか優しくて最初に恐怖を感じていたのが嘘のようだ。

フェジーの存在はわたしがこの世界でささやかな安息を感じることができる貴重な存在である。

「いえ……これは染めてあるので地毛ではありませんけど」

わたしは自分のダークブラウンの髪を指で弄りながら答えた。  
最近根元の方が黒くなりかけているのが悩みである。

「染める？そなたの世界では自分の髪を染めるのか？」

「はい。若い子だともっと明るい色にしますよ」

わたしが当然のようにそう言えば、フェジーはびっくりしたような顔をした。

「神からの授かりものにそのようなことをするとは……私には考えられん」

眉を潜めながら言うフェジーにはわたしは微かに笑みを零した。

「フェジーさんの髪は美しいですから染める必要なんてないですもんね」

「……そういう意味ではない」

フェジーがあんまりに難しい顔をするものだからわたしはもう一度笑ってしまった。

そんなわたしを見ていたフェジーはフツと何かを思い出したような顔をする。

「そういえば……前の天子は美しい黒髪だった。そなたの髪も元は黒いのか？」

「ええ……そうですけど」

黒髪……ということは前の天子も日本人か、それに近いアジア人なのだろうか。

いや、もしかしたら地球以外の世界からきた人間かもしれない。

黒髪というだけで断定は出来ないだろう。

そんなことを考えているとフェジーが思いもしないことを口にした。

「今の髪色も似合っているが、そなたは黒髪も似合いそうだな」  
「……え」

これと言ったのがもしセハンとかならお世辞だとわかり笑って返せるのだが、フェジーだとそうもいかない。

いつものような無表情のフェジーにわたしは戸惑いを隠せなかった。

「えっと……」

「どうかしたのか？」

自分の発言を気にした様子もなくそう聞いてくるフェジーにため息をつきたくなる。

「フェジーさん、わたし今分かりました」

「何だ？」

不思議そうな顔をするフェジーにわたしは一言。

「フェジーさんて、少し天然ですよね」

そう言う「何を言っているのだ」と眉を潜めたフェジーさんを見て、わたしは小さく笑った。

発見しました（後書き）

フェジーと花音の話を書いてほしい  
とのことで書いてみました。

微妙な雰囲気ですね

上手に書けなくてごめんなさい

リクエストを下さったm i i様  
ありがとうございます

おいくつですか？（前書き）

本編総無視

コメデイです

本編のイメージを壊したくない方は読まないことをおすすめします。

おいくつですか？

「……えっと、今何て？」

「そなたはいくつなんだ？と問うたのだ」

暖かな昼下がり。

廊下を歩いているとフェジーとセハンはばったりと遭遇した。

「……フェジーさん、女性に年齢を聞くのは非常識ではないでしょうか？」

「それはそれなりの歳の者に対してだろう？そなたはまだ若い」

一体どの口がそんなことを言うのやら。

わたしが若い？

「お嬢さんは１７、１８くらいかな？」

「その歳にしては少々度胸が強すぎる気もするが……」

「いや、子供の方が怖いもの知らずで……」

「なるほど」

１７、１８？

そりゃ日本人は幼く見られることが多いが、さすがにそれはないんじゃないだろうか。

「お二人とも、お世辞はいりませんので」

思わずそう言うと、フェジーとセハンは顔を見合わせて次の瞬間

セハンは恐る恐るという感じでこちらを見た。

「お嬢さん……何歳なの？」

その言葉に顔が引きつる。

「まあ、花の１０代ではありませんよ」

二人は少しの間固まって

「天子、嘘はよくない」

「お嬢さん、さすがにそれは冗談キツイかな」

真剣な顔でそういうのだから困った。

嘘言っでどうしますか。

そういえば、年齢よりも下の扱いを受けることが多かったなとわたしは今までの生活を思い出す。

わたしため息をついた後二人に向かっておいでおいでと手を動かした。

そして二人の耳元に口をやり……

「

」

二人が驚愕に目を見開いたのはその少し後。

だが、わたしの年齢がその後他の人に知れ渡ることにはなかった。  
フェジーもセハンも誰にも言わなかったらしい。

そのため、わたしが年齢よりも随分と幼く見られていることは変  
わず……

それを嬉しいと思うべきなのか、悲しいと思うべきなのかわたし  
は複雑な気持ちになった。

おしまい



おいくつですか？（後書き）

お遊びで書いた話。

花音の実際の年齢はご想像にお任せします

## 赤ずきん（前書き）

本編総無視

本編のイメージを崩したくない方は読まないことをおススメします。  
童話の赤ずきんを元にして書いております。

## 赤ずきん

昔々あるところに、テルタツテというそれはそれは可愛らしい女の子がおりました。

テルタツテは人々から赤ずきんと呼ばれていてそれはそれは可愛がられておりました。

「……まず最初つから間違ってるよね。僕女の子じゃないし」

「テルタツテ、細かいことは気にしてはいけないうて台本に書いてあるから」

「まあね……てか花音まだ出番じゃないでしょ？」

「誰のために出てきたと思ってるの……」

ある日、赤ずきんのお母さんは赤ずきんにお使いを頼みました。

「……………殿下？」

「何だ魔術師」

「……………殿下の威厳もその格好だと半減するね」

「……………ちよつと地獄まで行つて舌でも抜かれて来い」

「殿下、ちゃんと台本の台詞言わないと……………」

お母さんは赤ずきんに籠を渡すと言いました。

「……………この籠の中にはお菓子が一つとぶどう酒一瓶入っています。これを森の奥のおばあさんの家に持って行きなさい。おばあさんは病気で弱っているがコレをあげればきつと元気になるでしょう。外へでたらお行儀よくして、寄り道などしてはいけませんよ」

「見事な棒読み……………」

「いいからさっさと行け。これは命令だ」

笑顔で手を振るお母さんに見送られながら、赤ずきんはルンルンとスキップしてお使いに出かけました。

「殿下もう帰っちゃったし、僕もスキップなんてしてないんだけど……」

森の中に入ると狼がひよっこり出てきました。

「やあ、こんにちは赤ずきんちゃん」

「……………似合うねえセハン」

「テルタツテ、君もなかなかその赤ずきんが似合っているよ」

「……………」

「せつかく寝ているのに……………」

「嬉しくないよ。ってかセハンの存在覚えている人いるのかな？」

本編じゃもう空気なみにっ」

「さて、続きをはじめようか？赤ずきんちゃん」

「ちなみにセハンは本編の最初の方に出てきた医者だよ。ちょこちょこ出演してるけどみんな覚えてる？」

「赤ずきんちゃん？」

「はいはい続きね」

狼は赤ずきんに尋ねました。

「こんな早い時間からどこに行くんだい？」

「おばあさんの家に行くんだ」

「その籠はなんだい？」

「お菓子とぶどう酒だよ。ねえもう行っていい？早く終わらせて

帰りたい……」

「駄目だよテルタツテ。ほらっ、まだ台本に台詞残っているだろう?。」

赤ずきんは狼の質問ににこやかに答え続けました。

「おばあさんのお家はどこにあるんだい?」

「森の奥の、大きな櫨の木が三本立っている下の家」

「おばあさんの家に何をしに行くんだい?」

「……おみまいだよ。おばあさんは病気なんだ。でもこれをあげればきつと元気になる」

赤ずきんはそう言っただけ嬉しそうに籠を掲げて見せました。

そんな赤ずきんの様子を見ながら狼はこう考えました。

「若くて柔らかそうな娘だね。とっても美味しそうだ。おばあさんとこの娘、両方美味しく食べてあげよう」

「思いつき声に出てるし……なんかセハンが言くと別の意味に聞こえてくる……」

「おやつ、赤ずきんちゃんは随分と大人びてるね」

「……僕をなんだと思ってるのさ」

「ククッ、君が本当に若い娘だったらよかったんだけどなあ……」

「……ナレーター続きはじめちゃって」

狼はしばらくの間赤ずきんと並んで歩き、どうやって食べようか考えていました。

そうしてフツと道端に咲いている花を見て、良い案を思いついたのです。狼は不適に微笑むと赤ずきんを誘惑するような声で言いました。

「ほら赤ずきん。森を良く見てごらん？綺麗な花がたくさん咲いているよ？小鳥が楽しそうに歌ってるよ？まだ朝早い。時間はたっぷりあるんだからもつと楽しみながら歩いてごらんよ」

「嫌だ。早く行つて早く帰りたい」

「コラコラ、ちゃんと台本見て」

「……仕方がないなあ」

狼の言葉に赤ずきんは、そつと辺りを見回してみました。するとお日様の光が木と木の間から優しく降り注ぎ、たくさんの花が咲き誇っているのが見えました。小鳥は美しい歌を歌っています。

赤ずきんはその美しい光景に、思わず足を止めました。

「なんて美しいお花なんだろう……。おばあさんに持っていてあげたらきつと喜ぶだろうな」

「元気で良いにおいのする花を摘んで持っていてあげるといいよ。大丈夫時間はたっぷりあるからね」

赤ずきん狼の誘惑の言葉に負けて花を摘み始めました。

しかし一つの花を摘むと、この奥にはもつと美しい花が咲いているのでないかと思つて赤ずきんは森の横道へとどんどん入つていつてしまうのでした。

「……ねえ魔術で飛んじや駄目？」

「駄目」

そんな赤ずきんの様子をしめしめと見ていた狼は、赤ずきんが花を摘むのに夢中になっていいるうちにおばあさんの家に先回りしました。

大きな楠の木の下の家を見つめると、ニヤリと微笑みその扉をと

んonton、とノックします。

「どちら様ですか？」

「おばあさん、赤ずきんだよ。お見舞いのお菓子とぶどう酒を持ってきたんだ。開けてくれるかな？」

「声が明らかに、成人男性なんですけど……」

「ん？何おばあさん？。病気で弱っていてドアが開けられないの？大丈夫だよ僕が開けるから」

「えっ！ちよ、何を勝手に言ってるんですか！」

狼は取っ手を持つと勢い良く扉を引きました。

扉はバキッという音を立てながら開き、部屋の中にはベットに横になったおばあさんがおりました。

「その扉、引くんじゃなくて押すんですけど……」

「細かいことは気にしてはいけないよ、お嬢さん。おばあさんの衣装似合っているね。弱っている君もなかなか可愛いよ」

「セハンさん、本編よりもチャラくなってませんか？そんな台詞台本には……」

「台本通りにしてほしいの？仕方ないなあ。じゃあ台本の通りに……」

狼は案外若かったおばあさんのベットに近づくと舌鼓をしました。ペロリと自分の唇を舐めると、恐怖で動けなくなったおばあさんに妖美な笑みを見せ……

「いただきます」

「台本通りだけど何か違う気が！って、ちよ、いやああああああああ」

そのころ赤ずきは、花を集めるのに夢中になって森を駆け回っておりまして。集めるだけ集めてもう持ちきれなくなったとき、赤ずきは本当の目的を思い出しました。

慌てて元来た道に戻ると、おばあさんの家に走り出しました。

「何で魔術駄目なの？走るとか面倒なんだけど……」

おばあさんの家まで来てみると、戸が開いたままになっております。赤ずきは不思議に思いながら扉に近づいてこう言いました。

「おばあさん、いるの？」

すると、ベットのある方向からそれはそれは大きな金属音が……

「金属音って……え？」

おばあさんのベットの上では狼と一匹の猟犬が剣を交えて戦っておりまして。おばあさんはその光景を啞然とした表情で見つめていて、その隣では狩人が呆れた表情を見せていました。

「もう滅茶苦茶だね……というか犬……」

「テル！お前遅いぞ」

「いやっ、だって台本に書いてあるから……」  
「というかレヴォラ、  
猟犬の出番まだでしょ？」

「誰にせいで！」

「セハン、お前は少々やりすぎだ」

「フェジー様まで……僕は台本通りにおばあさんを食べよう」と



「どこが台本通りだ……花音殿お怪我はありませんか？」

「あっはい、大丈夫ですけど……」

「全く……もう良い。テルタツテ、さっさと見舞いの品を渡せ」  
「はい」

そんなこんなで、狩人と獵犬の活躍により狼は撃退され、赤ずきんは無事おばさんにお見舞いの品を渡すことが出来ました。

赤ずきんが摘んできた花は窓際の花瓶に綺麗に飾られています。

赤ずきんは知らない人に声をかけられても無視をしなくてはいけないということと、寄り道はしてはいけないということを学びました。

めでたしめでたし

## 赤ずきん（後書き）

お気に入り登録1000人突破しました！  
これもすべて皆様のおかげです。  
本当にありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6711p/>

---

世界を壊す救世主 番外編

2011年8月14日16時52分発行